読書と市民的家族の形成

読書と市民的家族の形成

ピューリタニズムの家族観

L. シュッキング 著

角　忍
森田数実
訳

恒星社厚生閣

読書と市民的家族の形

ピューリタニズムの家族観

L. シュッキン

森田数実
訳

江苏工业学院图书馆
藏书章

角　忍（すみ・しのぶ）
1951年　鳥取県に生まれる
1980年　京都大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学
現　在　高知大学人文学部教授
主要論文　「自然の技術」（ドイツ観念論との対話，第2巻『自然とその根源力』ミネルヴァ書房，1993年，所収），「超越論的演繹の証明構造 (2)」（高知大学学術研究報告第39巻，1990年）
主要訳書　ハイデッガー全集第51巻『根本諸概念』（共訳），創文社，1987年

森田数実（もりた・かずみ）
1951年　千葉県に生まれる
1983年　東京大学大学院社会学研究科博士課程単位取得退学
現　在　東京学芸大学教育学部助教授
主要論文　「フランクフルト学派と家族研究」（『フランクフルト学派再考』弘文堂，1989年，所収），「ハーバーマスと現代社会」（『現代社会学群像』恒星社厚生閣，1990年，所収）など
主要訳書　ハーバーマス『コミュニケーション的行為の理論（下）』（共訳）未来社，1987年
ホルクハイマー『批判的社会理論—市民社会の人間学』恒星社厚生閣，1994年

読書と市民的家族の形成——ピューリタニズムの家族観——
一九九五年一一月二八日第一刷発行

著者　レヴィン・シュッキング
訳者　角　忍　森田数実
発行者　佐竹久男
発行所　株式会社　恒星社厚生閣
東京都新宿区三栄町八番地
電話／東京三三五九—七三七一（代表）
振替／東京・〇—五九六〇〇番
印刷・興英印刷株式会社／製本・協栄製本株式会社

ISBN4-7699-0814-8 C3030

凡　例

＊　本書は、Levin Schücking, *Die Familie im Puritanismus: Studien über Familie und Literatur in England im 16., 17., und 18. Jahrhundert,* Leipzig und Berlin 1929. の全訳である。本書は一九六四年にベルンで、*Die puritanische Familie in literatursoziologischer Sicht,* の表題のもとで再版されているが、残念ながら訳者はそれをみることができなかった。

＊　原文の〈　〉《　》は、「　」または『　』で表記した。［　］は訳者による挿入を表わす。

＊　傍点箇所は、原文においてイタリック体もしくは大きい活字によって強調されている部分にあたる。

＊　原注は、各章ごとに通し番号を付して巻末においた。

＊　本文中に引用されている人名および作品名の日本語表記については、『岩波・西洋人名辞典』や代表的な文学辞典等により標準的と思われる表記を用いた。また原著者による引用箇所、参照箇所について邦訳のある場合には、その代表的なものを参照させていただき、最初に引用ないし参照されている箇所に、その表題と対応するページを記した。

序文

ピューリタンという名は、残念ながらあまり明確な概念規定とはいえない。歴史的にみると、ピューリタンは元来、イギリス国教会の内部で生まれ、また、そこで長く命脈を保っていたひとつの精神的潮流である。その潮流が表面に現れてくるのは、一五五八年エリザベス女王の即位とともに宗教改革の勝利が決せられたあと、一六世紀の六〇年代のことである。通常、その潮流の目標だとされているのは、神の崇拝からカトリックの残滓を一掃するという意味での典礼の改革、ならびに現存する教会制度の廃止または変革である。この運動の起源は、「血にまみれたメアリー」の治世のあいだ（一五五三―一五五八）大陸に追放されていた聖職者の努力にあるとされる。彼らはその間、進歩的なプロテスタンティズム、特にスイスのそれを知り、なかでもカルヴァンの教えを故国に持ち帰ったのである。この運動は、政府の激しい弾圧政策によって外的には脅威を受け、内的には強化されながら、いよいよ盛り上がった。運動が手のほどこしようもなく広がるにつれ、綱領はますます統一を欠くようになった。それゆえ、時の経過とともに、「ピューリタン」ということでまったく多種多様な集団が理解されることになる。そのため近年の学術文献では、「ピューリタン的」という語を用いることに対してくり返し疑念が呈された。実際、教会制度、典礼、場合によっては神学的教義の領分に属する問題を追究しようという場合、あるいは一七世紀の歴史で巨大な政治的意義を得るにいたった集団形成をきちんと扱おうという場合、「ピューリタン」という語ではまずどうにもならず、むしろ長老教会派、独立派、会衆派、バプティスト派、もっとあとの時期になると、クエーカー派などにかかずらわざるを得なくなる。しかしながら、ピューリタンの運動には、これまでに触れられたのとは別の、もうひとつの側面がある。そして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

それは、「ピューリタン的」という語が今日、「享楽を敵視する」、「禁欲的」といった意味を持つにいたるまで稀薄化した歴史が示すように、すべての側面のうちで最も重要なものかもしれないのである。この側面は、教会政治や教義とはおよそ何の関わりもない。それは、この運動の担い手にとって前からいちばん気にかかっていたこと、すなわち信者の実際の生活の営みに関わるのである。しかしここで問題となるのは、副次的な点でいくつか逸脱はあるとしても、ほぼ同じ刻印を帯びている生活様式、すなわち、敬虔主義を同一の中心とする大小さまざまな円として描かれるような生活様式である。イギリス特有のこの敬虔主義的な敬虔の特殊なありようを理解するには、家族神権政治に特徴的なメカニズムの研究ほど適切なものはないかもしれない。家族神権政治は、信者の宗教生活の核心として注目に値するのに、これまでそれ相応の注目を受けたことはまるでなかったのである。たしかに、この現象を「ピューリタン的」と呼ぶことについて、その呼称は――ことにのちになると――イギリス国教会に対立する者たちの集団には限られない、と異議を唱えることができる。しかし、懸念には及ばない。というのは、この家族神権政治の理論家、以下でその説を知ることになるパーキンズ〔William, 1558–1602, 神学の著述家〕、ガウジ〔William, 1578–1653, ピューリタンの聖職者〕、ロジャーズ〔Daniel, 1573–1652, 聖職者〕、バクスターといった人びとは、やはりみな同じ陣営に入れてしかるべきだからである。すなわち、典礼や教会制度をめぐる闘争や政治抗争において、同じ軍旗に忠誠を誓う者なのである。もちろん、みたところ彼らの影響力は、敬虔主義的な生き方に関しては、征服した領土が党派の境界を越えるほど強大であった。というのも、ひとつの例をあげれば、家族神権政治のなかで確固たる形をとる限りでの、実践的敬虔の理想と形式とを、イギリス国教会派たるジェレミー・テーラー（一六一三―一六六七）と、この領分でほぼ一貫して初期ピューリタニズムの思想財を糧とするピューリタンたるリチャード・バクスター（一六一五―一六九一）、この両者の著作でくらべてみると、互いに見まごうばかりに似ているのに一驚せざるを得ないからである。これらの人びとの考えは、教義や教会制度の綱領の点ではひどくかけ離れているにしても、こと生き方の教え、例えば家族の務めに関する教えになると、きわめて著しい一致をみせるのである。幾世代もたたないうちに、『ロビンソン・クル

ーソー』を著したダニエル・デフォー（一六六一？―一七三一）その人が、ある環境におかれた模範的家族の場面を描いているが、彼はこの環境が国教反対者とイギリス国教会、両者いずれのものでもあり得る、とはっきり強調してさえいる（『家庭指導書（*Family Instructor*』一七一七、前置き）。こうして次のことが明瞭になる。すなわち、実践的敬虔にとって基本線は、国教主義と諸宗派とを分かつ線ではなく、信者すなわち「目覚めた者」と世俗の子とを互いに分かつ線だ、ということである。イギリスに特徴的な敬虔主義的-自己改革的敬虔にとって、宗派の名称はもはや意味を持ってはいない。実際この意味で、例えばサミュエル・リチャードソンのような人は、もともとイギリス国教会派ではあるが、ピューリタン的な環境の出である、ということができる。

以下では、ピューリタニズムの思想世界を論ずることになるが、この世界に隣接して生きている同種の思想――テーラーやティロトソン（一六三〇―一六九四）のような人の考え――を、その持主がピューリタンでないからといって枠子定規に無視するようなことはしていない。これに抵抗を覚えないためには、いま述べた事情を念頭に置いておく必要がある。というのは、先に述べたように、この領域では境界は存在せず、したがってありもしない境界を顧慮することに意味はないように思われるからである。同じ理由から、問題となる理念の、一八世紀にまで及ぶ影響と、ヒューマニズムの時代におけるその克服を追跡することが正当化される。

しかし以下の研究に課された課題は、一つだけに限られない。すでに述べたように、この研究は一方で、アングロサクソン文化の特殊な精神的発展にとって他の何にもまして重要となった宗教的-倫理的共同体、そうした共同体のなかでの生活の営みの核心を示そうと努める。というのは、ここでは愛と結婚、両親と子ども等々についての信者の見方に光が当てられるが、その見方は過去数百年のイギリス人の考え方を知る上で必要不可欠であるのみならず、少なからぬ点で今日にいたるまで影響をとどめており、近代的人間の形成に寄与しているからである。

それゆえ、従来なおざりにされてきたこと、ピューリタンの運動――この書で特に重要な意味を持つひとつの生活様式としての家族生活の営みに現れる限りでの――から宗教改革以前の時代につながる道筋を探し求めることも必要

だと思われた。それは、まずもって暗がりのなかで手探りしながら前に進む以外にはない、そういう過渡領域である。その際に控え目に特に試みられるのは、カルヴィニズムはピューリタニズムの運動の源泉と考えられるのか、考えられるとすればどの程度にか、という問いに答えることである（本書七五頁以下を参照）。ひとつの国民的人格理想を研究する特別な一章をまず最初に置くことも、われわれのテーマにとって有益と思われた。もちろん、この人格理想が、ひとつの普遍的妥当性を持つ公式を提供する、などといった主張をするつもりはない。そういったものはおよそ存在しないのである。とはいえそれは、アングロサクソン文化の心的相貌において、数世紀を経ても目立って不変な多くの現象に対する説明を容易にするかもしれない。しかし他方、この研究は、文学史家の領分から着手したものとして、家族神権政治に関して得られた諸成果を、時代の最も重要な文芸作品のいくつかを理解するために役立てようとする。このようにして、例えばミルトンの『失楽園』のなかで、他の角度からは明らかにはならないような多くの点が、風俗史の観点から解明される。バニャン、デフォー、最後にはリチャードソンの作品にもスポットが当てられる。文学によるこうした国民教育者は、これまで一面的に審美的観点から考察されすぎたふしがあるが、われわれのやり方は、彼らの倫理的意図を正しく評価することに貢献できる。

そのほかに、貴族文化から市民文化への過渡期における家族の運命を探求し、最後に、家族が一八世紀になごやかな共同体、読者となるという事実が、作者にとってどのような意義を持つかを問うことにより、家族の持つ特殊な文芸社会学的意義に着目している。

踏破した領域はたしかに広大で、当然のことながら設定された課題の解決はしばしば素描的、断片的で、不完全である。筆者は、永年ここで取り扱った問題に取り組んできた――論文の形で公表した一連の準備作業はこの本のなかに一部盛り込まれている[1]――とはいえ、これに続く研究によって多くのことを敷衍し、少なからぬ誤りを正さなければならないであろう。それにもかかわらず筆者は、今日その数を増しつつある、文学史は風俗史という基盤なしには考えられない、という意見を持つ人びとの側から、何がしかの賛同を得られるのをあえて期待する。人間の生み出す

芸術を正しく把握できるのは、まずその人間自身を理解した場合に限られるからである。

読書と市民的家族の形成

——ピューリタニズムの家族観——

目次

序文　ii

序論　ピューリタニズムと冷静・沈着の理想……1

一　イギリスの人格理想における「自制」の役割　1

二　歴史的例証：宗教の影響を受けた作家—リチャードソン、スティール、デフォー　3

三　一七世紀の例。ピューリタン　6

四　シェークスピアの作品に見られるこの類型の発展形態の具象化。ヘンリ五世　7

五　個々の特徴の刻印。自己探求としての「自制」　9

六　自己探求のさまざまな影響。憂慮すべき側面：自虐、自己満足、気難しさ、硬直性　12

七　有益な側面、積極的な姿勢の基盤としての確信。自尊心　14

八　親密さを阻む障碍としての魂の独立を求める努力　18
九　冷静・沈着という理想の起源。ジュネーブのカルヴィニズムにおける類似した現象　19
一〇　イギリス中世に存在する萌芽。モア、ループセット、『富める者と貧しき者』、'sobrete'　20
第一章　ピューリタニズムにおける結婚……24
一　結婚生活と家族に関するピューリタン文献：家教化書（Hauszuchtbucher）　24
二　聖書という模範　26
三　宗教改革の結婚観の展開。バクスターの例外的立場　28
四　結婚の最も重要な条件。最も危険な誤り　32
五　結婚生活における両性の基本的関係。妻の地位に関する証言　35
六　妻の従属。競合する義務のシステムによる緩和　39
七　妻の従属の限界　42
八　性愛の共同体としての結婚生活。夫婦の性交　44

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

九　宗教的共同体としての結婚生活。祈りにおける心の吐露　46
一〇　なごやかな共同体。妻に対する精神的理解　48
一一　いくつかの実践的帰結。女性特有の本性に対する配慮　51
一二　夫婦という愛の概念の進歩性　53
一三　現実と原則との関係。クロムウェル、ヘンリ夫人、ハチンソン夫人、バクスター夫人　56

第二章　ミルトンの『失楽園』におけるピューリタンの結婚生活の反映……60

一　「教化書」としての『失楽園』。性愛　60
二　知的、精神的共同体　61
三　共同労働、共同生活の義務　62
四　共同の喜び。客のもてなし。天使とのピクニック　63
五　破局の原因。女の類型としてのエヴァ。エヴァの弱さ　65
六　ミルトンのストリンドベルイ的女性観　68

七　「道徳家ぶる人（prig）」としてのミルトンのアダム　69
八　ミルトンの作品に出てくる男女関係におけるピューリタン的なものと非ピューリタン的なもの　70
第三章　ピューリタニズムにおける両親と子ども……72
一　ピューリタンの生活様式の核心としての家族神権政治　72
二　W・ティーリンク（Teelinck）の一六〇四年バンベリにおける滞在記　73
三　カルヴィニズムの支配下にあるジュネーブの状況はイギリスの場合とは異なること。ルターの見解　75
四　ホイットフォード、スコットランドの公教要理、トマス・モアにみられる家の規律の起源に関する証拠　77
五　家共同体の相貌に特有な個々の特徴の発展　79
六　家族教会の起源　81
七　家族観。子どもの数の制限、幼児期、最初の宗教教育　83
八　家の外での教育　86
九　子どもの従属　88

一〇　家族における懲罰　90
一一　目覚めに精進すること　92
一二　質素、勤勉の教育　93
一三　子どもの職業選択への両親の取り組み　94
一四　子どもの結婚。両親の役割　95
一五　両親の同意がぜひとも必要であること　96
一六　意志形成への強制と影響　98
一七　ハチンソンとクロムウェルの例　99
一八　なごやかなつながりが不完全である原因：抑圧された母親の地位　100
一九　兄弟姉妹相互の関係　104
二〇　家族の宗教的究極目的。生に対する態度　107
二一　若者に敵意を抱く傾向（Jugendfeindliches）と禁欲的傾向　108
第四章　主人と召使……112
一　家族の一部としての召使　112

二　双方の義務　113
三　状況と見方の変化　115
第五章　バニャンとデフォーにおける家族……118
一　夫と父親としてのバニャン　118
二　『天路歴程』第二部の構想　119
三　女性キリスト教徒の夫婦愛　121
四　バニャンにみる家族生活のいくつかのモチーフ　122
五　結婚生活の賛美者としてのデフォー。『ロビンソン・クルーソー』における賛美　125
六　結婚に関するデフォーの書物　127
七　『家庭指導書』と『宗教的求婚』とにおける回心の物語　128
八　ピューリタニズムにおける女性の心の発展。クロムウェルの娘とデフォーの女主人公　131
第六章　貴族文化における家族の役割……134

一　ピューリタンの文化的閉鎖性、貴族世界の見方　134
二　家族に対するスウィフトの立場。チェスターフィールドとドクター・ジョンソン　137
三　道徳週刊誌の家族プロパガンダ活動　140
四　徳の学校としての家族。子どもの描写。模範としてのカトーの家庭生活　145
五　他の文学ジャンルにおける家族に好意的な傾向　147
第七章　文学的問題としての家族。サミュエル・リチャードソン……149
一　リチャードソンの問題　149
二　『クラリッサ』の意味　150
三　貴族・宮廷人の理想に対する戦い。主導者としてのスティール　152
四　クラリッサ・ハーローとピューリタンの家族　156
五　道徳家としてのリチャードソン。ゴールズワージの反対例　158
六　リチャードソンの芸術の二面的相貌(Januskopf)。宗教的なものの後退。新旧の家族問題　159

第八章　文学の読者としての家族……164
一　女性の教養と文学　164
二　淑女（Dame）と文学　166
三　リチャードソンと淑女たち　167
四　フィールディングと淑女たち　169
五　フォーダイスの説教　171
六　家族の人間化。両親と子どもの関係　174
七　家族のなかでの朗読　177
八　文学にとっての意義。モチーフとしての家族の発見　181
結論　186
原注　189
解説　200
人名索引　I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com